Part 1

教育関係者＋企業人
座談会

地域を活性化させる人材をいかに育てるか

地域の高校生が地元の大学に進学する比率は年々上昇しているが、地方経済の停滞から依然として就職は厳しい状況だ。地域で育った人材が、地域を活性化するという理想的な構図を実現するために、高校、大学・短大、そして企業は何が出来るのか。九州地区の教育関係者と企業人が語り合う。

これからの社会で求められる力

山河　皆さん、本日はよろしくお願いいたします。

臨時増刊号Ｖｏｌ・１では、「自ら学びに向かう高校生をいかに育てるか」というテーマで教育関係者と企業人との座談会を掲載し、多くの反響をいただきました。そのなかで地域特有の課題もあるという声が多かったため、今回は九州を舞台に高校、大学・短大、そして企業との関係性を考えていきます。それぞれの立場から、地域社会を活性化するため出来ることを探りましょう。まずは、これからの社会で求められる力について、企業サイドからご意見を聞かせてください。

見城　地方の視点で述べると、福岡では朝の散歩などで見知らぬ人同士が挨拶をし合う人間関係の近さがあります。学校でも社会でも、そういう気持ちを持ち続けられる人づくりをしたいですね。人を大切にする心がなければ、どんな事業でも行き詰まってしまいますから。

更にＩＴ化は進みますし、海外の人材との競争もますます強まります。「機械や安い労働力で簡単に置き換わられない力」が求められるでしょう。大きく言うと、出会う人や社会に対応する力と言えると思います。社会を生き抜こうとするたくましさも欲しいですね。

目原　確かに、たくましさは必要です。私が駐在した上海では、現地留学や日本の大学を経て現地採用で活躍する若者が多く見受けられました。駐在員なみの金銭的処遇は得られないものの、現地人とも対等に渡り合う、生き生きとした姿を見て、たくましさを感じ、最近の日本人の若者も捨てたものではないと思いました。最近のマスコミ

今しか出来ないことを
一生懸命やり遂げて
ほしい

目原弘一

報道などを踏まえると目的意識の強い学生と、漫然と日々を過ごす学生との二極化が進んでいると感じます。

宗　大学でも、目的を持つ学生と持たない学生の二極化は実感します。たくましさに通じますが、夢を持ち、諦めずに挑戦する気持ちも、社会に出てから大切になると思います。自分のやりたいことを見つけて、一歩を踏み出す勇気を持つ学生を育てたいと、常々考えています。

山河　目的意識に関して言うと、今の高校生は就職に大きな不安を抱いています。そのため、学校に対して就職に分かりやすく結び付く指導を要求してくる。企業が求めているのは、もう少し広い意味での人間力、すなわちたくましさだと感じるのですが、いかがでしょうか。

目原　そうですね。社会全体が就職を過度に意識している影響なのでしょうが、本人の興味や考えが横に置かれたまま進んでいる気がします。学生時代に積むべき経験が不足し、小さくまとまった印象を受けるのです。結果として、自分で考える力や当事者意識の低下につながっていると感じます。企業としては、何でも良いので、自信を持って「今しか出来ないこれをやり遂げました」と語れる人材を求めています。

高校生に夢と現実の両方を伝えたい

大山 明

高校生・大学生に見られる課題

山河　就職を巡り、生徒・学生が置かれている状況をお聞かせください。

大山　本校の大学・短大への進学率は7割ほどですが、商業高校でもあり進路指導は就職が核となる面があります。卒業生が頑張っていることもあり、地元企業の求人が充実している点には地域のつながりの強みを感じます。

一方で、生徒は報道などから就職が大変厳しいことを知り、「フリーターになったらはいあがれない」と不安を抱いています。再チャレンジのシステムが社会に構築されれば、そうした不安も払拭されると思うのですが。

下田　就職への不安は、学習態度にも影響し、無駄なことはしたくないという「費用対効果」の感覚にもつながっているように思います。入試に不要な教科と判断すると、早々に学ばなくなるのです。

木下　実際、就職活動に苦労する学生が多いです。入社試験の間口は広いのですが、なかなか面接にたどりつけず、何十社も受けている学生もいます。

見城　それだけ多くの会社を受ければ、業種はバラバラですよね。「やりたいこと」を貫くのは難しいでしょう。

宗　難しい問題ですね。本学の場合、自宅から通学可能という理由で入学し、もともと目的意識が弱い学生もいます。就職活動の時期まで、将

参加者

◎高校より

久留米市立
久留米商業高校
進路指導部主事
大山 明
Oyama Akira

福岡県立城南高校
進路指導部長
下田浩一
Shimoda Koichi

◎大学・短大より

福岡女子短期大学
広報課課長
木下健作
Kinoshita Kensaku

福岡女子大学
入試・広報・
キャリア支援室次長
宗 康成
So Yasunari

九州工業大学
情報工学部教授
安永卓生
Yasunaga Takuo

◎企業より

株式会社西鉄プラザ
代表取締役社長
見城正浩
Kenjo Masahiro

株式会社安川電機
人事総務部
人事・キャリア開発部
キャリア開発グループ長
目原弘一
Mehara Koichi

◎ファシリテーター

株式会社
ベネッセコーポレーション
教育事業本部
中学・高校・大学教育
事業ドメイン
山河健二
Yamakawa Kenji

来についてあまり考えない学生は当然、就職活動で苦労しますが、失敗を繰り返すうちに自分と向き合い、大切なものが見えてくる。大学としては、一人ひとりを丁寧に励ましながら、何度も挑戦させます。きめ細かいサポートは、小規模大学ゆえに出来ることだと思います。

下田　将来を意識するあまり、「今すべきこと」が見えない生徒も多いですね。女子生徒が「自分が何になりたいか分からない」と、深刻な表情で相談に来ました。「別に今は分からなくていい。目の前のことを一生懸命やれば必ず見えてくる」と答えると、安心したのか泣き出してしまいました。

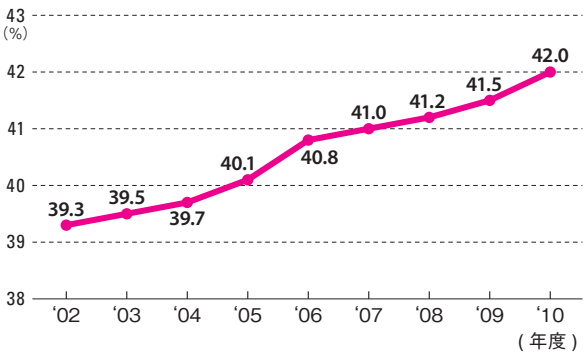
私たちは「未来探し」や「自分探し」を言い過ぎたのかもしれません。いつか、理想の自分像が見つかるはずと、夢見るあまり、今の自分を見失っている。そうではなく、この瞬間の自分を受け止め、変えていかなければならないのだと、キャリア教育で強調しています。

木下　同感です。結果や成果を意識しながら常に力の限りを尽くすこと、同時に社会の一員であることを忘れない心構えが重要でしょう。その結果、社会で求められる信念や情熱、感謝の心などが育つのではないでしょうか。

見城　社会ではコミュニケーション能力も不可欠ですが、学生にコミュニケーション上の課題を感じることもあります。面接するとよく分かりますが、あまり周囲から制約を受けずに育っているために発想が自由な半面、周囲に対する配慮が苦手なようです。特に、自分のことは話すのに、他人の意見は聞かない学生が目立ちます。

下田　物怖じせず、自己主張する生徒は増えましたが、例えばテストの成績が悪いと「でも私、頑張ったんですよ！」と主張をしたり、逆に、自信家の割にはちょっとしたことで自信を失ったりする。自分を守るために、現実を直視するのを恐れているようにも見えます。

図1　大学入学者に占める地元高校出身者の割合



大学入学者のうち、大学所在地と同じ都道府県の高校出身者が占める割合。不況の影響、高校生の地元進学志向の影響で年々、地元進学率がアップしている

＊文部科学省『学校基本調査』

未来を探すばかりでなく
今の自分を見つめ、
変えていくことが必要

下田浩一

「見えない力」を育むために

山河　教科学力が「見える力」ならば、社会を生き抜くための力には「見えない力」も多く含まれると、お話をうかがって感じました。こうした見えない力を、どのように育んでいるのでしょうか。

大山　大企業や有名な会社に入れば幸せなのではなく、仕事を通して人から喜ばれたり、感謝されたりすることがやりがいにつながります。そのためには、学力だけではなく、コミュニケーション

常に全力を尽くし
社会の一員であることを
忘れない心構えが大切

木下健作

何を出来るようにして
社会に送り出すかを
大学は問われている

安永卓生

能力や人間力が必要でしょう。最近の若者はコミュニケーション能力に欠けると言われますが、そうは言い切れないと思います。大人が本気でぶつかれば、優れた面が表れ、期待に応えてくれることも多いからです。学校行事や部活は、そうした力を育てるのに適しています。

宗　確かに課外活動での学びは大きいですね。私は地元の城南高校出身ですが、高校でも大学でも、サッカーに没頭しました。皆で目標到達に向かって努力し、苦しさを楽しさに変えていく経験は社会でも生きています。新卒で民間企業に入社後、苦しみながらも前に進めたのは、目標があり、仲間がいて、皆が一体になって取り組むという、学生時代の部活とよく似た環境があったからです。

山河　学校行事や部活は「答え」がないからこそ、学びが大きいのかもしれません。

下田　そうですね。そのような活動の中で、苦しみながら何かをやり遂げることで自分なりの答えを探し、自己肯定感や目標達成感が生まれる。高校時代、そういう体験を積んだ生徒はその後も成長し、社会に出て地域に貢献できる人間になると考えています。

安永　見えない力を育てるため、大学の授業も変わらなくてはなりません。今まさに、各大学がディプロマ・ポリシーをはじめ、明確なポリシーに基づいたカリキュラムの編成を進めています。「何を教えるか」だけではなく、「どう教えるか」「何を出来るようにして社会に送り出すか」を考え、狭義の学力にプラスして、見えない力を育てようとしています。

山河　具体的に進められていることはありますか。

安永　学習習慣が身に付いていない学生がいるため、自己学習力や自己評価の力を身に付けることから始めています。また今の学生は、教員と一対一の関係は築けますが、仲間と協同する力が欠けています。そこで最近、教育活動にグループワークを取り入れ、協力して問題を解決する活動を導入しました。

社会への希望を育む「地域連携」

山河　企業の方からも、「今しか出来ないことを一生懸命にやれ」と言われれば、高校生も勇気付けられそうです。どのようにして地域が生徒に夢を持たせて元気を与えるか、お考えを聞かせてください。

目原　上手く背中を押すことが大切ですね。例えば、市場の「グローバル化」は競争激化という厳しい面だけではありません。未知の世界で自分の活躍の場が見つかるかもしれない。だからこそ、地球規模で物事を捉える意識と、色々なことに興味を持つ純粋さを大切にさせる。そして、今しかできない何かに、とことん打ち込んで納得がいくまでやり遂げさせることだと思います。

見城　グローバル化とは、海外に出たり、外国人と接することだけではありません。自分の周りを見るだけでなく、日々の生活が外国とかかわっているという感覚を持たせることも重要でしょうね。

宗　いろいろな大人と話し、「生きていくのは、苦しいけど楽しいこともある」「こんな目的を持って生きている

いろいろな大人と話し
気付く機会を提供する
ことも重要

宗 康成

人もいるんだ」などと気付く機会を提供することもポイントになると思います。生きていくこと、学ぶことに目的を持てば、苦しいことに耐える力が付き、自ずと学習に向かうのではないでしょうか。

大山　おっしゃる通りです。本校でも、現役で公認会計士に合格した卒業生に講演を頼んだり、地元企業の社長に仕事の面白さを伝えてもらったりしています。今の生徒は、周囲に憧れる存在がいないことが多いようなので、企業や大学との接点を設けて、憧れを抱く契機となるよう取り組みを模索しています。

安永　今の子どもは、保護者が働く姿を身近に見ることがなく、社会を知らずに大人になります。社会に興味を持つきっかけが少ないのです。今後は、地域の大学や企業が主体的にきっかけづくりを担う必要があるでしょう。

目原　企業としても共感します。人づくりには、まずは家庭が大切です。以前、職場に社員の家族を招く機会を設けたら、子どもが父親の席に座り、山積みの書類を見て「帰宅が遅い理由と頑張る父親の大きさが初めてわかった」という話がありました。身近な大人が目標であり支援者となるよう、社員の育成に努めていこうと思います。

山河　小中高大、そして企業の連携は、地域活性化の核になると思います。既に実践されている取り組みも多いようですね。

木下　本学は地域貢献活動として、希望する学生が小中学校を訪れ、漢字や計算学習の添削、パソコンの指導、花壇づくりなどをします。その活動をしても単位には認定されませんし、活動内容は小学校の先生と話し合って決めてもらうというアバウトな制度ですが、学生は自ら進んで参加します。

安永　場を与えることで、学生は変わっていきます。我々が考える大学の果たすべき役割をひと言で表せば、「知の創造と発信」です。小中との連携によるサイエンスクール、小中高への出前授業、また図書館などの施設の開放をはじめ、大学に蓄積された知を積極的に発信することで、子どもたちが将来への展望を広げ、夢を持ってもらう機会になればと考えています。

日々の生活から グローバル化を 実感させたい

見城正浩

大山　出前授業などで魅力的な先生に来ていただくと、生徒の目が輝きます。「人は一生学び続けるもの」と伝えると同時に、学びの素晴らしさを伝える機会を設けて意欲を引き出していきたいです。企業や大学には、夢と現実の両方を話していただきたい。「今の高校生はつまらん！」と言ってもらって構いません。そのほうが生徒も本気になりますから。

下田　将来的に地域社会に貢献する意思を持ち、地域を活性化させられる人材を育てることも高校の使命と感じています。自分のためだけに目標達成を目指すのではなく、働くことによって貢献できることの素晴らしさを教えたい。高校や大学で、そのように感じられる場をもっと与えることで、地域で貢献できる人材が育っていくのではないでしょうか。

山河　今ベネッセコーポレーションでは、地域のお役に立てる存在になるための枠組みを模索しています。学校、家庭、地域社会、そして企業による連携が、今後の教育に不可欠であることを、ご意見をいただき改めて実感しました。本日は本当にありがとうございました。

答えがある学び 答えがない学び 双方を追いかける高校生に

山河健二

九州支社長インタビュー

目指すは「九州全体の文教都市化」学校や地元企業との連携を強化したい

株式会社ベネッセコーポレーション　九州支社長　**高橋正勝**

働くことの素晴らしさを伝え、社会や将来への希望を持たせたうえで、厳しさもきちんと説明し「だから頑張ろう」と背中を押す。座談会では、今後の教育に求められる指導として、多くの参加者がそのような考えを述べられました。ベネッセとしても同じビジョンを共有し、教育を通した地域活性化に取り組んで、地域社会が抱えるさまざまな課題にアプローチしていきたいと考えています。

ベネッセ九州支社が目指すのは、多くの人が「九州の魅力は教育」と認識する「九州全体の文教都市化」です。その実現に向けて、今後10年間で取り組む三つの方針を打ち出しました。

一つめに、全国的に子どもたちの学びのモチベーションの低下が問題視されるなかで、自ら学びたくなる仕組みを提示し、入試でもそれ以外でも発揮できる学力の向上や生きる力の養成を図ることです。二つめは、教育を通した地域活性化を実現し、アジア圏を中心とした海外を含む他地域から、人や企業が訪れたくなるエリアにすることです。そして、最後に、「郷土愛」の育成です。たとえ他の地域に就職しても、地元への貢献意識を忘れない人材を育成することで、地域活性化が促されるはずです。

このような方針の下で、2010年11月、小さな一歩を踏み出しました。高校生、大学生、そして企業をつなぐ第1回「ドリ勉部！キャリアトレーニング編」の実施です。キャリア教育と教科学習をセットにした企画で、まさに冒頭で述べたこれからの教育に求められる指導と一致するような内容です。

社会は楽しいことばかりではなく、時にはいばらの道と感じることもあるかもしれないけれど、前に進むことにワクワクする――。地方は財政的にも人口的にも厳しい現状を抱えています。それを打破していくためには、学校や地元企業との連携を深めながら、前向きな気持ちを持つ子どもを育てていくことこそ、最も大切なことではないかと考えています。

ドリ勉部！キャリアトレーニング編

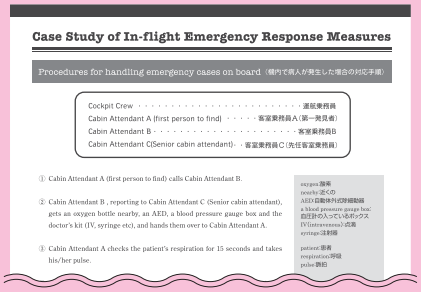
高校生と企業をつなぐ新形態のキャリア教育

「ドリ勉部！キャリアトレーニング編」は、ベネッセ九州支社が発案した新形態のキャリア教育。九州支社が面する博多駅前通りには、多くの企業がオフィスを構える。土日に通り沿いの企業に会議室を開放してもらい、高校生に業務内容に関連するキャリア教育と教科学習をセットで行う内容だ。第1回は、2010年11月7日、日本航空福岡支店との共催で実施。福岡・佐賀・長崎の高校に告知し、52人の高校生が参加した。

当日は、パイロットやキャビンアテンダント、航空整備士が、業務内容ややりがい、高校時代の体験などを講義。続いて、九州支社が作成した教材を用い、機内でのやり取りを英語で演じる学習を行った。英語学習の指導は九州大の学生が担当。仕事内容に興味を持ち、モチベーションが高い状態で教科学習に取り組んだ。

参加者アンケートでは、満足度は5段階評価で4.8と非常に高く、「もっと英語を学びたくなった」「パイロットの仕事に興味を持った」などの感想が寄せられた。

11年度から、月1回のペースでさまざまな業界の企業と共催する予定だ。夏休みには、複数の企業で同時開催し、高校生が教室を選ぶ企画も検討中だ。「キャリア教育を通して高校生、大学生が地域の企業とつながることで、オフィス街を人材育成の拠点へと発展させていきたいです」（高橋支社長）



Case Study of In-flight Emergency Response Measures

Procedures for handling emergency cases on board（機内で病人が発生した場合の対応手順）

Cockpit Crew ・・・